

ふたつの青春：淪陷区・北京の鬱屈と飛翔 (2)

立石, 伯 / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

30

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019892>

ふたつの青春

——淪陷区・北京の鬱屈と飛翔（二）——

立石 伯

中蘭英助の青春の発見と喪失は、日本現代史の特徴的な一領域におけるきわめて劇的で象徴的な様相を呈していた。漫然と中国にわたった少年後期の時機には予測を絶した、異国の軍事的な占領地北京での内的な精神の運動の過程での出来事であった。つまり、自己発見であり、青春の発見でもあった。また、その喪失と新しい時代への身構えと建て直しを要求された苦闘の時空でもあった。

竹内好は、既述のように一九三二年二十二歳の時、外務省半額補助の学生旧満州旅行の帰途、自費で北京に回り、その空気を存分に知り、孫文の『三民主義』に感銘を受けるとともに、中国語の勉強の必要性を痛感した。この体験は氏を大きく一步文学的・精神的な飛躍へと導いた。それが、武田泰淳や岡崎俊夫らを語らつての「中国文学研究会」の結成へと駆りやったことは解りやすい消息である。これはもとより青春の発見と言うよりも、青春の深化の過程であり、自己の進むべき方向の模索と確定のための努力というべきであろう。それが研究会の発足と、そこでの作品発表を含めての若者たちの切磋琢磨にほかならなかった。さらにいえば、一人の文学者

の誕生を印しづけるものでもあった。

これは端的に、自分を中国文学の研究者に限定するのか、小説を含めての文芸と評論に力を注いでいくのか、それともその両者の統合としての作家・研究者・評論家の内的な統一を目指して行くのかあまりにもきびしすぎる選択と言うべきであった。もとより、それが総体としてどのようなようにその精神内部で腑分けされていたかという問題は明確ならざる問いかけである。恐らく竹内好自身においてそうであり、また決定的なことは、氏がそのような発想をするかという困難極まる問いかけでもあろう。そして、あるいはそれにも係わらず、結果論的に言えば、氏は研究者に自己限定して行かざるを得なくなった。というよりも、氏の青春の喪失は、作家への道の苦渋に満ちた断念ではなかったかとすら推察される。それを決定的に眼前に突きつけたのが、ほかでもない、氏の意図を超越した形で進行了た三七年から三九年までの二年間の二度目の北京滞在であった。中蘭英助がやはり北京にたどり着いて精神の彷徨をはじめた時機である。そして、氏は大きな一步を歩みだした中国文学の研究の

利便ばかりでなく、中国の現実、さらには中国における反日の雰囲気は是非知りたいと外務省の留学生として再びかの地に足を踏み入れたのである。日中戦争下の北京の濃密な空気を呼吸しつつ、また新たな自己省察と時代の意味を洞察するよう強いられた時機が訪れたのである。

先を急がないで、氏の少年後期からの習作や若書きというべき諸作品であれ、その小説や評論を検討することで氏の精神の闘いの跡を追尋していくことにしたい。

氏の初期習作が、全集第一七巻の「花の都」(一九二三・大正二二年)「感情……」(三〇年)「男たち」(三一年三月「校友会雑誌」第一一〇号、小早川素夫の筆名で発表)「運動部を廃せよ」(三〇年)「校友会雑誌」後記」(三〇年)そして卒業論文の「郁達夫研究」(三三年一月二月)にとどまるかどうか現在のところ調べる手筈が整っていない。「郁達夫研究」と「男たち」を除けば特に取り上げる必要はない。いや、この二編の中にこれ以降の竹内好の文学と思想の原質と方向性があるというべきであろう。

さて、青年期にマルクス主義、あるいは思想的な運動に影響を受けた若者たちはいくつかのタイプに類型化できる。特に大正末から昭和初期にかけての東大新人会に代表される青年たちには顕著である。そのタイプ化は藤田省三や鶴見俊輔らの『転向』研究でほぼ網羅できる。ここでその詳細は割愛し、次の二人の文学者に限定して類比することにする。一人は竹内好より十一歳年長で、したがってアナキズム思想の影を濃厚に宿した初期マルクス主義の深い認識を抱いていた大正十年代はじめの石川淳である。その初期作品に「ある午後風景」(一九二二年・大正十一年)「長助の災難」(同二三年)

がある。もう一人は、一九三二年二十一歳の時、東京帝大支那文学科に入学後加入したRSで知り合った同期生の武田泰淳である。両者の関係はこれから終生つづく。あるいは、大阪高校時代の友人で、「ゴギト」の保田与重郎や田中克己との葛藤や感受性の異質性について、基本的な位相から検討すべきかもしれない。マルクス主義との関係での対比は、その思考法や発想がもつとも対極に位置していて、十ヶ月ほど年長の、後年親交を結んだ埴谷雄高の文学とその意識についてである。特に埴谷雄高との政治とマルクス主義、国家観、中国革命論などとの対照はこれまでほとんど捨象されつづけてきているので、是非とも一瞥すべきであろう。両者の思想的、文学的な諸問題の対立的・異次元的な構図は興趣溢れる切口を開示するはずなのである。だが、この小論ではやはり割愛する。

石川淳の「ある午後風景」と竹内好の「ある男」の一節を引用してみる。まず「ある午後風景」に目をむける。

「美しい!と、彼は思った。しかし、それだけでは物足りなかつた。あの彫像のやうな裸身は賛美されていゝ。だが、その銅色の皮膚の裏に包まれた、湧き立つた心臓や、空になつた胃の腑や、さては日々の労働に衰へて行く四肢の筋肉などを、『美しい』の一語だけで、見逃すことが出来やうか。(中略)

若し、彼等が此の窓から飛び込んで来て、『おい、兄弟、握手しよう』と、あの泥だらけの手を差し出したとしたら、彼はどんなに有頂天になることだらう。だが、反対に、自分があの穴の中に飛び込んで行つて、握手を求めたとしたら……『うるせえ、為事の邪魔にならあ。』と一言の下に刎ねつけられるかも知れない。

しかし、彼は淋しいとは思はなかつた。われ／＼の手が永久に反撥し合ふのではない。もう一息だと云ふ気がした。」

労働や労働者に対する知識人の若者特有の賛美とそうする自分の座っている「役所の椅子」に対する自己批判が縋いあわされている。いわゆる肉体労働者に対する親近感には、もとより恵まれた自己の知識人としての贖罪意識がないわけではない。その自己凝視の上で、人間の同一基盤に立とうとする。彼なりにともに手をつなぎうる回路を求めて、その一種甘美な思いや衝動を単なる《夢》に終わらせないよう苦慮するのである。石川淳は、アナキズム的な自由、いわば精神を柔軟な形に保持しつつ、その根源に横たわる内的な自由を大切にしたのであつた。ここには青年期特有の、特に大正末から昭和の初年代に、左翼的なインテリゲンチヤを見舞つた精神のひとつの傾向が端的に示されているのである。次に引いてみる竹内好の文章は、学生・インテリゲンチヤの相互批判の典型的な在りようをこれまた端的に証示している。

「火箸を動かしてゐる男は、相手の男の棄てた吸殻から聯想を生んでゐた。例へば謄写版を、一度刷つては一枚とり出すと云つた様な単純な仕事を、其仕事の役割りを充分に評価してやつてゆける人間は偉い——と云ふ言葉を思出したのだ。」

——これはインテリには仲々難しい仕事だ。
男は、煙草の吸殻を丹念に埋めてゐる自分の手首を見凝めてゐた。——プロレタリアは別の感情を持つてゐるだらうか。」

学生の彼らは、友人について、結婚について、労働について、勃興して来つつある労働者階級というもの等、さまざまに思いを巡らす。つまり、そこには肉体的な次元でのプロレタリア的な感覚を獲

得できるかどうか、肉体的な労働の持つ過酷さに堪えることが可能か否か、神経的に社会変革に堪えうるか否かなど、精神と肉体の予測されうる葛藤についてやはり窺知しようとする。

石川淳と竹内好の初期、そして既述の中蘭英助の初期、二十歳前半期の青春の文学を彩る特質の一つは、若者特有のひりひりするよくな自己凝視と他者批評、女性との関係や対社会的な問題に対する独自の関心の深さだといひうる。これ以降の彼らには批判的に超克される浪漫的な心情、情熱的な女性に対する意識、時間や歴史についての楽観主義的な見解等が垣間見られるであろう。例えば、竹内好が次のように歴史を把握するのは、恰好の例証にほかならない。

「男の日は大きな流れの推進力を考へてゐる。恐らくそれは止ることを知らぬであらう。西暦二千年の夜明けをもこの大きな流れはキツカリ七十年の後に齎らすだらう。西暦二千年——恐らく人々は一九九九年の最後の日の夜は篝火を焚いてこの記念すべき日を迎へるであらう。その日には人間たちの感情は如何に変わる事か。それにも増してこの国のもろ／＼の有様が変わることか。この二十世紀が如何に混乱と苦難に満ちて顧られることか。七十年——しかしそれだけを生きることは不可能だ。」

十五年戦争の始まろうとする時機に、作者は転変定かならぬ七十年先の未来を夢想しようとするのである。主人公の歴史意識や社会構造の認識にその人間・世界構想が伏流していると見てもよい。あるいは世界の巨大な動きをどうにか把握してしまいたいという欲求がある。「男は巨きな歯車を考へてゐた。その歯車に楽についてゆく自分と、息を切つてしがみついてゆく相手の男とを画いた。——俺の方が多分に楽天的らしい。恐らくこの相違は俺とこの男の性格と

環境の紙一重の隔りから来るのかもしれない。だがこの止ることを知らぬ歯車は人間の感情をも、鋭利なメスが皮膚と肉とを剥がす様にハッキリした二つの方向へ押しやるだらう。」この男の目には、マルクス主義の視座を通じた形で「歯車」と「混乱と苦難の世紀」が幻視されているのである。いわば、自己の現在の思考において未来の時を想像的に統御したとき、この男は自己の実存の真実に到達したと言いうる。つまり、相手の男と異なつて、自己の生の方向と存在の在りようを掴まえたと言ひ換えることができる。竹内好のマルクス主義への傾倒は、その思想的・歴史的・経済的なものに関するその当時の読書の左翼的な色合いに端的に示されている。この地点から中国への関心がどのように発展していくかまだ不分明ではあるにしても。

氏は初期習作「男たち」から一步踏み出してどのように文学世界をのぼしていこうとしたのか。大学卒業に至るまでに小説の有無は不明である。マルクス主義関係の書物と中国文学関係の書物の読書と考察に没頭していたらしい、あるいは大阪高校七回生同窓会の文芸部関係の諸計画とその実行にも時間を割いていたようである。そして、卒業論文「郁達夫研究」を見ることとなる。卒業論文そのものは、年譜に従えば、執筆の年の夏休み明けに郁達夫を読み興味を抱いて、なぜ時間のある休みに読まなかったのか後悔したという。もとより、すでに多くの知識は蓄えていたはずである。したがって、短い研究期間のわりには資料等の目配りや対象把握も的確である。論文についていくらか記せば、考証と論の二部よりなり、郁達夫とその文学を、苦悶の詩人、人間苦、社会苦、時代苦の四側面から適切に追尋している。結語の一節がその総括になっているので読んで

おきたい。

「郁達夫——彼は苦悶の詩人であった。彼は自己の苦悶を真摯なる態度を以て追求し、大胆な表現の中に曝露することによつて中国文壇に異常なる影響を齎した。何故ならば彼の苦悶は同時代の青年の社会的苦悶の集約であつたからである。だが、中国社会の進化の急速さは永久に彼の苦悶を今日の苦悶として止めることは出来なかつた。時代の転換期に於て彼は新しい苦悶の渦中に飛込むことなく、自己の歩んだ道を固守することによつて苦悶から脱却したのである。」

郁達夫にのめり込んだ遠因、その世界に没入した理由の一斑の明快な結論である。そして、この論を背骨のごとく支えていた認識は、序言で述べられていた郭沫若と郁達夫との文学の質と傾向の対比の上で成立していたのである。「郭沫若の作風は軽快、明朗である。彼は同じく封建意識に反抗しながらも、あくまで颯爽として新時代の自由を謳歌している。之に反して郁達夫は終始沈鬱、鈍重の作風を失わなかつた。」浪漫的なふたつの精神のうちの、建設的・積極的であるものよりも、暗いもの、破壊的・破滅的なものを氏はあえて選択してその考察を為した。ここに氏の文学的な傾向と意識の性質がくつきりと刻印されている。人は自己と対照的なもの、というよりもかすかに察知される自己の精神の闇に目を凝らしてしまうものかもしれない。この性癖は、氏を魯迅研究への道に、ひいては氏の文学観の核心、中国文学に対する関心領域と研究の方向性を画するものでもあつた。第一回の満州訪問につづく北京滞在への意図は、氏を右に記したような形で文学の道へと誘つたが、恐らく、この時期には自己の中心的な仕事として、小説に邁進するか、作家・作品研

究への道を選ぶかという意識は、唯一無二の関心でなかったはずである。

したがって、大学卒業の翌年、中国文学研究会の結成に向けて奔走して、ついに雑誌創刊にこぎつけるとともに、新しい中国と中国文学認識を尖鋭に打ち出すに至るのは、ほぼこの精神葛藤の線上の出来事として想定できる。この小論では、「中国文学月報」や他の雑誌に掲載の論文等や業績の評価にはわたらない。直ちに、北京再訪の在りようとその機微にペンを向ける。

ところで、昭和十年代、一九三〇年代後半の北京とはいかなる政治的、文化的位置にあったのか。これはもとより、日本の近代史における対中国、対朝鮮、さらには極東ロシアから東南アジア問題の大きな環の一環、そのもつとも枢要な位置にあるものとしての中国、その中心城市としての配置であり、それに係わるものの立場や思想の核心にほかならなかった。

わたしが先に石川淳の初期小説を引き合いに出したのは、それ自体のテーマ的な意味は当然ながら、今一つの隠されたモチーフがあった。すでにお気づきのように、昭和十四年に発表された石川淳の名作『白描』の主人公の「北京征服」という世界構想を喚起することである。この主人公・鼓金吉の見解は読者に多くの解釈と深読みを要求するものである。字面ではとうてい酌み尽くし得ない深い謎めいたものが隠されていることだけを断っておこう。

「ぼくはこれから参加しようとする大事業に着手したのだと。われわれはもつと多くの立派な花を咲かせるべく、まづ花が咲くに適応したところの社会から創り出すのだと。これは抽象論なんぞではありません。現実、今日の使命です。われわれが生

きてゐるこの時代では、それよりほかに事業はないのです。そして、そんな社会を地球上のどこに実現すべきか。われわれはその場所を承知してゐます。北京です。今年昭和十一年、それはもはや満洲ではなく、北京です。やがて数年後新聞記事的現実が追いついて来るであらう日よりも前に。」

金吉の意図は、現実の動向に関する想像力の一つの可能性として措定されていた。そして、彼のような認識に類似した位相で中国、あるいは北京を捉えていたものもいたはずである。竹内好も「新聞記事的現実」とは異なつた点で、北京をみたいと思いつづけていた。虚構の作品の人物の構想する世界認識に接近した一つの構想を氏の青春の目論見のなかに認めることができる。断るまでもなく、石川淳は竹内好や中蘭英助のような心情的・精神的次元で中国と係わつたわけではない。とまれ、それは同時に、竹内好がこれ以降の歴史の動向の根源的部分を見通していたためだといつても過言ではない。その訪中が、一回目が満州事変の翌年、二回目が日中戦争勃発の年にあたるのも単なる偶然ではない。それはいわば一種選ばれた日付なのであった。

氏にとって、満州・中国問題は、自分の生存に係わること、生き方に関係した境域で生じていたはずである。三〇年代からの中国への日本人の移住、移民の増加、特に日中戦争勃発以降の日本人の激増は、中国という国、北京や上海という都市などには恐るべきことであつた。いうまでもなく、これらの都市は、王朝の交代のたびにさまざまな民族によって取って代わられていた。しかし、陸続きの国家群で、いや近代的な意味での国家概念とは些か異なるが、交流や侵略や戦争の惨禍を互いに体験しあつた諸民族同士の権力の交代

であつた。ところが、日本の場合はそれらと異質な侵略にほかならなかつた。その難しい国家・民族間の諸関係を、日本人として、一市民として、中国文学の研究者、現代小説を構想する一文学者として、解き明かすよう迫られたのである。つまり、氏は中国において、異民族、異文化の視線に徹底的にさらされることを受け入れたと言ひ換えてもよい。

この難問と同質の問いと視線を、氏は徐々に直覚しはじめていた。中国文学研究会の同人や当時の本流であつた漢学や支那学の研究者達の嫉視や侮蔑をまじえたものである。特に前者の仲間達の視線は肉体に食い込み、精神を攪乱する性質のものであつた。というよりも、彼らにあつては文学が生き方に係わつていた。私見では、氏の作家への方向と研究者への道の分岐点は、単に氏の素質、才能、天稟などはもとより、これらの友人達との厳しい関係性の中で知らず識らずのうちに醗酵していったものではないか、と考へたい。そして、その場所・空間が北京という異国の風土の中であつた。その明確な例証の一つは、武田泰淳の「北京の輩に寄するの詩」(「中国文学月報」第四四号、三八年十一月)ではなかつたか、と臆断している。書かれた時代、論を進める順序を無視してまずこの詩を引用しておきたい。(長いので一行二字空きで引用)

「北京に集りし我等が輩よ　　中支からでは悪口もとどかぬな
れど　　かくもあこがれの一角に集りし輩に　　何か言はずに
居られようか　　嘗て銅幣にめぐまれざりし我等　　そば屋に
て麦酒飲みて　　宙天より落ちたる勢物凄く　　東方の文化を
喰ひものにする者共を嘲り　　更に屢々使徒面したる我等自身
の鼻先をつまみあげたるが　　そは大陸の城の中には非ずして

アカデミイの古本に囲まれたる　　本郷の巷にてありし　　今
お前等のあこがれの北京の秋　　澄みたるは北京の空だけで
お前等の眼は黄塵に濁つてゐるだらう　　黄塵に濁るとは何た
る幸福者ぞ　　お前等心優しき驢馬よ　　忘帰忘帰と啼き
文学の綱に縛られて　　天に向ひて憐れみを乞ひたるも　　現
実の雲は美しきが故に冷酷に　　我等支那病患者の上に垂れ下
つてゐた　　北京の輩よ腸を出せ　　たとへ売られ行く豚の腸
より安くとも　　落ちて黄塵にまみれるであらう　　塵にまみ
れた腸の上に　　たわけた涙が落ちたとしても　　北の乾燥し
た空気がすぐかはかしてしまふよ(後略)

安徽省の街から、と末尾に記された明快な詩的思考の点描されたこの詩は、以下にさらに十四行つづく長詩である。その中の一行に「自分でわからぬT君の脳」と、また「どんな子供が生れようが大陸の事だかまふものか」という二行がある。割愛した詩行はつと砕けた表現で、同人の批評に独特の味わいが感受される。武田泰淳が日中戦の開戦早々召集を受け、華東に出征後一年ほど経過した頃の諷刺詩である。この同じ号に「土民の顔」が掲載され、そこに「文化人・東方における知性の華を花咲かせることを夢みる人は、一人の農民の表情の中に人間の表情をよみとる深い愛がなければなりません。」と記していた。

竹内好は「二年間(黙することの難ければ)」(「月報」第五七号、三九年一二月)という日記抄録の文章で次のように述べている。「武田『北京の輩に寄するの詩』を載す。これに感動す。」「武田の詩を読んで、北京の輩の応ふる詩を作らうと思つて、どうも詩にならない。文章にしようと思つて、一寸書きかけたら、百字ばかりすらす

ら書いて、あとは何を書いてい、かわからない。」竹内好が、北京でさまざまに思い悩み、自己の文学と思想とを根底的に自己批判している渦中に眼にした武田泰淳詩であった。また、明快な中国の民衆論でもあった。親しい友人とはいえ、常に指導的な立場で対してきた武田泰淳の中国での兵士体験によるめざましい脱皮に刮目した様がこの一項に活写されている。憶測するに、竹内好が自己の詩的・小説的才能にある不安を感じはじめた点だといえるかもしれない。何気ないようなことながら、私には竹内好の心事が垣間見られるような気がする。いわゆる「北京日記」の三九年帰国一ヶ月後に「武田はやはり我が第一の友なりとちかごろ感ずること深し。武田の近くに居たいと云う気があって」と記述している。注目すべき考えである。つまり、ここに中国と決定的な関係を結んでしまった友人であれば、竹内好の生き方が彷彿としている。

竹内好の「二年間」は、選択された表向きの文章である。この小論のモチーフからすれば、三七年から三九年にわたる日記、その間に二年間の北京滞在があつて、『竹内好全集』に「北京日記」として収録された文章の方が格段に多くの内的な苦悩や精神の疾風怒涛の様相が刻み込まれていて、私達はきわめて多くの生と存在の闇について沈思させられるのである。いわば、公表された「二年間」と筐底深く秘されていた「北京日記」の記述・認識の落差のうちこの前後数年の竹内好の真実の闇が拡がっているということもできよう。(仄聞するところによれば、全集への収録に強い反対があつたにも係わらず、監修者の一人である埴谷雄高がその全貌を後世に客観的に示す意味でも収録すべきだと説いたとのことである。)つま

り、この日記には、既述のように内面の闇、精神の彷徨、愚昧な言行、いろいろな蹉跌、自己嫌悪や自虐、不安や絶望感、他者に対する厳しい眼差し、女性に対する認識や好み、日本人や中国人、文学や政治に対する冷めた見解や批判等が充填されている。一種の精神と生命の凝縮された爆発物の趣がある。当然、氏のこれ以降の生と文学の方向性の選択に大きな力が目に見えない形で働いたのだと考えてもよいものである。

氏の青春後期のありようが克明に記された「北京日記」は、したがって全体的に読まれてはじめてその深い真実の相を垣間見せてくれる。その中からあちこち特徴的、眼をそばだてるような点を抽出しても、書く側の者が単にあざとい像を結ばせようがための仕掛けに過ぎない。だが、あえてここでは氏の感性、認識、行為、思考法、对他者関係等で特徴的な諸点のみを、些か長くなるにしても列挙しておきたい。もとより、中国古典、当代文学、研究書、中国語関係の書物、日本のそれら、また文芸雑誌や小説、定期刊行物など、読書の量と範囲は広く、深く、膨大なものがある。単に読むばかりでなく、きちんと身銭を切つて蒐集し、その量も多く、質も確かなものである。氏は生活が乱れ、四苦八苦しているときにも、蒐集、読書を基本的に放棄していない。しかし、それらは次の引用では措く。(月日は省略する。)

三七年一月から。「車夫、家の前にて土下座す。即ち一毛錢を与う。」「北京通信」、内務省より痛く叱られたる由。」
三八年一月から。「生活の改善を思うことしきりなり。」「東京にては第二次人民戦線検査あり。」「武田より来れる手紙はまことに見事にて感嘆永くす。翻読数回して倦きず。武田の進歩に驚く。」「佐藤

先生と一日、八大胡同をひやかし、(中略) また一日、蘆溝橋を見、その美しさに驚かされたり。「三百二十円の収入あり。既に費消して残額なし。驚くべき浪費なり。」「学校よりの帰途、まことに北京の秋を感じ。堪えがたき親しきなり。」「昨夜、近代図書館、中原公司等焼けたりと。(中略) 巧妙なる爆薬を仕掛けありたりと。」「小説を書かなくてもいいから、文学者としての矜持を失わずに生きたいと切に懇う気持なり。」「文学の世界は空怕しきものなり。」「このままではならじと思う。やはり思想を追かけて掴まねばならぬと思う。いかにもすばらしい思想でもいいから掴まねばならぬと思う。」「さて語学の本を作るとして、文学があきらめられるものかどうか。ちかごろ性慾がなくなったような気がする。」「昨年北京へ来てから三、四月頃までの生活の印象はあざやかである。」「日記を廃すること十日である。泣きたくなる。毎晩酒をのんだ。四回女を買った。」「世の中でくだらぬは俺だけかもしれないと思われた。(中略) いまや我、我を失えり矣。」「何かがちりしたものにぶつかってゆきたし。そういう荒々しいものの呼吸をかいで生命の力をもやしたし。」「三九年一月から。」「院長より周作人狙撃の報をきき、」「思うこと書くこと更になし。借金はたまるばかりなり。これわが一生に再びあるべきか。未だ愕然として醒めたりと云えず。」「亡父のことが思われてならず。芸術と人生につき考う。」「絶望の一夜。」「幽鬼の街」にまた芥川竜之介の亡霊が出てくる。しかし作品はつまらなし。この程度のものなら俺でもかけると思える程度なり。」「美しき女の純情かなと、思えば我が身の不実を悔いる気持も湧く。己の心に住む悪魔。」「かくまで愛慾に苦しむことがあり得たとは、思えば不思議にもなる。」「竹内峯子と云う実在せぬ名前を本日消させた。」

塘沽から門司への船中で、「俺は北京へ渡る時のはっきりした気持を考え、いま復路の弛んだ気持に照しては駭然たるものがある。既に如何なる希望と目的とを有するか。(中略)俺は芳子で失敗し、今また峯子で失敗した。」「恐らく何年か北京を見棄てて日本へ帰ってきた。一度はこのまま朽ち果えて惜しくないと思った北京。いまはるか思いとなって我が胸を苦しめる北京。つい手が届きそうで、もはや苦しい思い出しか残らぬ彼方へ消えてしまった北京。」

日記に記されたこれらは、文字通り竹内好の青春の発見と喪失との核を語ってあまりある。青春期の終わりを彩るめくるめく彷徨が刻みこまれていて、ひとつの精神の在りかたの典型を見ることができ。乾燥した北京の空のもと、竹内好の精神の闘いは、右の記述に示されている以上にきびしくかつむごたらしいものであった。戦争下でありつつも一見泰平に見える北京の街々でひっそりと営まれた一人の青年の生活とその苦闘の様が右にひいた諸記述のうちに刻印されている。氏が公表した批評や日記等の文章の背後でくりひろげられていたこうした葛藤は、郁達夫に見た暗さ、苦悶、消極性、破壊性、悲劇性等と精神の奥深くで通じ合うものがある。そして後年、というよりも一生つきあいつづけた魯迅とその認識の核心《掙扎》という理念を生み出すことになった確乎たる基盤となっているはずだといっても過言ではないのである。もとよりこのことは、後年の精神的事件であって、血みどろな自己切開の文章からいま確認すべきことはつぎの諸点である。

北京から帰国以降の氏の精神の営みは、一度切開した自己の魂の底の底からの再建の努力にほかならなかった。一言で、新しい自己の確立こそ要請された。この過程でもっとも尖鋭に表面化されたも

のは、ほかでもない《自己否定》である。私は、生涯にわたって自覚的に保持された氏の否定哲学の背骨を貫いているものは、北京体験の思想化過程において決定づけられたものではなからうかと臆断している。否定の上でしか新しい言葉や自己や社会や世界や事態に対処できないという考えは、もとよりずっと以前からきざし、胚胎されていた。けれども、厳しい北京体験によって、それが地盤深く打ち込まれた支柱と呼ぶべき精神の揺るぎない杭となってしまうたという。これが氏を一個の強靱な思想者へと後年に飛躍させる要因でもあったことは疑い得ない。

氏は「支那を書くということ」（四二年）や「佐藤春夫先生と北京」（同年）という文章で北京滞在の頃を振り返って、自己の決定的な欠陥や無力さを別の文脈のもとで剔抉した。ほぼつぎの視座である。前者の文章で、自分は「仙」はおろか、「狂」ですらない。行動の基準となる灯火が消えてしまったようだが、それはかつての中国再訪と関係がある、「阿呆は支那へ行って、自分を失ってしまったのである」という。後者のそれで、自分は当時日中文化の提携を本気で信じ、出来ると思っていた。そういう仕事こそ大切なことだと思っていたにも係わらず、現在では全く自分の力にあまり、全くだめだともいう。自分は肝腎な中国を知らないし、もとより、日中戦争の大きさを実感として持つことが出来なかった。自分たちに何が出来たのか。「無力である。完全に無力である。いまに国民の全部が、その目で支那を見るだろう。僕らが、自分だけに愛し自分だけに知りうると思い、それゆえ矜りをもちえた支那が、日常茶飯事になろうとしている。」だからこそ、同じ年の「中国文学」第八十一号の「後記」に、三十年の生涯のむなしさを託ち、もう一度改めて中国をみたい

ともいう。「一ぺんでも世の中を動かしてみたい。実際、今までは動かされてばかりいたのだから。」と決意を新たにして、回教圏研究所の所員となっていた氏は、回教圏の文化や宗教や民族等の研究のため北京、蒙疆、南京等に行こうとしたのである。

竹内好のいう「無力」さや自己意識の崩壊の認識は、武田泰淳にも、そして中園英助にも共通した思いであり、簡単に克服・超克できない在りようである。いや、この無力の自覚・認識こそ、彼らの思考の飛躍へのバネであったというべきである。彼らは中国で、いわば火炙りの刑を受けたと比喩的に断言できよう。じりじりと業火に肉を焼かれ、魂に酷い傷を受けざるを得なかった。そして、縛り棒から降ろされたとき、息絶え絶えの彼らは僅かに残る力を信じて、ペンに全身を委ねようとしたのである。それが彼らをして『魯迅』『司馬遷』『第一回公演』を書かせる内在的な力となったといえよう。つまり、中国、中国人、北京、上海等が彼らを憎悪と焦燥に充ちた眼で見ていること、その眼から逃れることができないこと、そうだとすればそれらの監視のもとでそれらの本質に接近することのみが求められ、また自ら求めていったといえるのである。つぎの文章をよく味わってみたい。

「絶対の立場として云えば、つまり今日の文学を信ずるか信じないかということになるのである。僕は、少くとも公的には、今度の会合が、他の面は知らず、日支の面だけでは、日本文学の代表と支那文学の代表との会同であることを、日本文学の榮譽のために、また支那文学の榮譽のために、承服しないのである。承服しないのは全き会同を未来に待つ確信があるからである。」（「大東亜文学者大会について」四二年一月「中国文学」）

氏は自らの北京体験とその省察のもとに、戦争下の中国を明確に認識していた。どのような現状であるのか、文学者達は何処でどうしているのかよく観察していた。そして、日中戦争の開戦の意味を自分たちなりに深く認識しようとしていたし、そのもたらす絶大な影響をも予測できていた。つまり、氏は、あるいは氏らはこうした認識を為す位置に自らを高めていたのである。いわば、すでに述べたい方に従えば、氏は一個の思想者として、文学者として出現し得ていたといえるであろう。

したがって、「宣言」に示された大東亜戦争(太平洋、第二次大戦)や大東亜文学者大会、あるいは報国会などにたいする氏と同人たちの認識は、それから二年後の「中国文学」の廃刊と会の解散へとなだれ込んでいく必然的な道筋であった。竹内好にあつては、もはや「小説を書かなくてもいいから、文学者としての矜持を失わずに生きたいと切に懇う気持なり。」という類の認識を克服した精神的な位相にたつていたはずである。これは恐らく、氏が小説家か研究者かという選択、あるいは逡巡を終息させた位置ではないか、といいかえでもよからう。つまり、自分の目指す文学の中軸が研究や小説の区別ではなく、(表現)次元で統合された。自らを表現者、思想者として自立させる道の確立であった。これは北京体験の唯一無二的な昇華・超克法でもあつた。

さて、竹内好と中蘭英助の青春の発見と喪失の様相には大きな差異が見受けられた。八年間ほとんど華北・北京の住人となつて中国の命運とともに日常を生きたと、中国と日本の関係において決定的な時機に数度訪れることで、その細密画を描きながら中国の動きに眼のはなせなくなつた人の差異だと簡単にいうことはできない。生

年の十年の差が、中国の動向とそれを認識・分析するのに大きな影響を与えたであろうにしても、それも決定的なものではない。

牽強付会の言をあえて付加すれば、竹内好、中蘭英助、武田泰淳などが中国と北京で体得したもつとも枢要な精神の衝撃は、すでにのべたように決定的な《無力さ》であつた。彼らは自己の全精力を傾けた闘いに敗れ、自分の甘さ、腰のすわらなさ、見通しの暗さをさらけ出した。自らの不明を自覚することは、たえざる自己否定と中国・中国人に裸で対峙する情念と意志の確認であつた。この対峙法と認識の差異に、竹内好と中蘭英助の違いが現象したのだといえるであろう。

つまり、このふたつの青春の示す相違は、中国・中国人との距離感に起因するはずである。中国のもたらすイメージは、中蘭英助にとつては、肉感的なものであり、竹内好にとつては理念的なものだといつても誤解はあるまい。これはマルクス主義やイデオロギッシュなもの洗礼を受けた昭和初年代から十年代中頃に青春を生きた青年と、心の奥で高まる不分明な欲求や衝動に忠実であろうとした昭和十年代に青春を生きた青年との差異でもある。これが、青春の発見とその喪失のありようにおいて鮮やかな分水嶺を形成した。つまり、ふたつの青春の軌跡のうち、中国という謎めいた国、北京という魔的な都市と強い関係を結んだ青春の劇とそのふたつの見事な精華を、私たちはくつきりと聳え立つふたつの山容を異にした秀峰として遠望することができたことにほかならない。

(文学部教授)